



〈史料翻訳〉『東中欧からのドイツ人追放の記録』
第1 巻（3 分冊）「オーダー・ナイセ線以東の諸地
域からのドイツ系住民の追放」より、オーバーシュ
レーゼンに関する証言 （3）

衣笠, 太朗

(Citation)

近代, 131:85-110

(Issue Date)

2026-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503541>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503541>



〈史料翻訳〉『東中欧からのドイツ人追放の記録』 第1巻（3分冊）「オーダー・ナイセ線以東の 諸地域からのドイツ系住民の追放」より、 オーバーシュレージエンに関する証言（3）

衣 笠 太 朗

Die Vertreibung der deutschen Bevölkerung aus den Gebieten östlich der Oder-Neisse, T. 1-3, (Dokumentation der Vertreibung der Deutschen aus Ost-Mitteleuropa, in Verbindung mit Adolf Diestelkamp... [et al.]; bearbeitet von Theodor Schieder, Hrsg. vom Bundesministerium für Vertriebene, Flüchtlinge und Kriegsgeschädigte, Bd. I), Unveränderter Nachdruck der Ausgabe von 1954, München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1984.

〈解説〉

本稿は、『近代』第129-130号に掲載された同名記事（1）と（2）^①に続く史料翻訳である。ここでは、『東中欧からのドイツ人追放の記録』（以下、『追放の記録』）という5巻本の史料集・証言集のうち、第1巻「オーダー・ナイセ線以東の諸地域からのドイツ系住民の追放」（初版は1954年刊行）に収録されているオーバーシュレージエンに関する証言の一部を訳出する。

「ドイツ人の避難と追放 *Flucht und Vertreibung der Deutschen*」とは、第二次世界大戦末期から戦後にかけての中東欧の諸地域から、1200万人以上のドイツ系住民が避難した、もしくは強制的に移住させられた出来事を指す用語である。『追放の記録』の史料的偏向をめぐる諸問題とその史料的価値、ならびに

オーバーシュレージエンに関する基礎情報については本シリーズを通じて同一であるため、(1) と (2) を参照してもらいたい。

ここでの翻訳対象は、オーバーシュレージエンにおける 1945 年 4 月の避難、およびその後の時期の「追放」に関する 5 つの証言 (⑪～⑮) である。「避難」はソ連軍の到来に伴ってドイツ系住民が大挙して移動した出来事を指し、「追放」はソ連の影響下においてポーランド行政機関によって実施された強制移動措置を意味する。

本稿より、2025 年夏にドイツ連邦文書館バイロイト館で収集した『追放の記録』編纂時の原史料 (BArchiv OSTDOK2) からの情報を含めた各証言の概要を記載する⁽²⁾。証言⑪は (2) に掲載した証言⑥から、証言⑫と⑬は同じく証言⑦～⑩から連続するもので、相互参照を前提に編纂されている。証言⑪の原史料は 4 頁の手稿文書であり、その主眼はレオプシュッツでの強制移動、収容、強制労働についての記述である。調査者は「その情報は事実に基づいており、出版に適している」と簡潔に評している⁽³⁾。証言⑫～⑬は主に 1946 年前半に実行された「追放」に関する証言であり、そこに至る経緯や強制労働について述べられている。証言⑫の原史料は 8 頁の手稿文書であり、調査者によれば、後半の追放に関する記述が「ポーランドがポツダム協定の締結以前から独自の判断で「追放」を試み、それによってロシアや西側諸国と対立したことを特に明確に証明している」という点で重要であるという⁽⁴⁾。証言⑬に関して、原史料は 6 頁の手稿文書で、その中で戦争末期のソ連軍による攻撃から 1946 年 7 月に「故郷から追放された経緯」までが記載されている。調査者は「言語的、正書法的にぎこちないが、その主張は正確かつ信頼に足る」としている⁽⁵⁾。

証言⑭は、原史料では手稿で 37 頁にわたる比較的長大な証言記録である。その概要は 1922 年以來のドイツ系住民の状況から始まり、1945 年 1 月の避難とソ連およびポーランドによる統治を経て、最後は 1946 年 9 月までの西ドイツへの移動に至るものである。調査者は「よく書けていて、全般的に非常に信頼で

き」、特に「シュレージエンへの帰還とその後のロシアとポーランドの統治下の時期」が最も優れていると述べている。ただいくつかの記述は「冗長」であるがために「省略が必要」とも述べられており、出版時には、1945年1月から2月頃にかけての避難と故郷帰還までの経緯に焦点を絞る形で6頁の紙幅にまとめられた⁽⁶⁾。証言⑮の原史料は8頁の手稿文書であり、その記述はポーランド統治下での苦難の体験に注力している。調査者は「必要なデータをすべてまとめた簡潔で優れた報告書で、個人的な内容に偏ることのない」ものであると推薦理由を述べている⁽⁷⁾。

以上を踏まえたうえで、本シリーズ発刊の度に読者に注意を促したいのは、『追放の記録』という証言集に内在する問題である。その証言を歴史的事実の把握のために用いるには厳密な史料批判が必要であり、その意味で証言の中で記されていることを「ありのままの事実」として受け取ることはできない。『追放の記録』をめぐる史料批判の方法および史料批判のためにポーランド側の史料を活用するなどした分析について、私は論文を順次発表している段階であり、そちらも併せて目を通すと理解がより深まるだろう⁽⁸⁾。

当然ながら、訳文の稚拙さ、誤訳、事実誤認のような翻訳にあたっての問題は、すべて訳者の責任である。

〈注記〉

・各証言の冒頭には、証言についての情報が付されているが、それは〔出典情報〕と〔資料情報〕の2つの部分から成っている。〔出典情報〕は、『追放の記録』においてその証言が収録されている箇所の巻・部・章・節・頁を翻訳して示したものである。〔資料情報〕は、『追放の記録』の各証言冒頭に示されている情報（資料番号、証言の概要、証言の採録状況、資料タイトル）を翻訳して提示したものである。

- ・訳文中の丸括弧 () は原文そのまま、角括弧 [] は訳者による補足を示す。地名に付される補足は現在のポーランド名もしくはチェコ名である。
- ・イタリックになっている文章は、『追放の記録』の編纂者による補足説明である。

〈訳文〉

証言⑪

[出典情報] 『追放の記録』 第1巻「オーダー・ナイセ線以东の諸地域からのドイツ系住民の追放」第2分冊・第3部「オーダー・ナイセ以东の諸地域からのドイツ系住民の追放と強制移住」・第2章「ポツダム協定締結（1945年8月2日）以後の1945年における追放作戦」第1節「シュレージエンからの追放」(S. 707-708)

[資料情報] No. 306 オーバーシュレージエンのレオブシュッツ＝シュレーゲンベルク [ルヴォヴィアニィ] 出身の農民 J. K. の体験報告。

オリジナル、1952年8月3日。

レオブシュッツ [グウプチツェ] からの労働不能者の追放。残留住民の強制労働⁽⁹⁾。

我々の市町村は、1945年8月27日にレオブシュッツ収容所に連行された。その時の様子は次のようなものであった。夜中1時にポーランド民警 [ポーランドの警察組織] がすべての家にやってきて、我々は15分で、布団と我々が持っているはずもない14日分の食糧——ポーランド人はロシア人と収穫を分け合っており、ドイツ人には回ってこなかったのだ——を準備させられた。それから当地の全住民が、すぐに持ってこられるわずかな所持品だけを持ったまま、追いついて集められた。というのも我々は明かりをもっていなかったし、重要な

物品は納屋や倉庫に隠してあったからである。一時はポーランド人たちが、その後はロシア人たちが表向きは武器の搜索のためにやってきて、毎日略奪が行われた。結局、レオブシュッツの方向へ追い立てられ、すでに有刺鉄線が張り巡らされていた、閉鎖された製材所へ行きついた。翌日、15人が収容所から我が村の農場へ労働者として再び連れ戻され、あるポーランド人のもとで使役させられた。

1945年9月27日までは別の人々が収容所に収容されていたが、そこで彼らは列車に乗せられ、16日間食糧なしで移送された。既婚の娘と息子、そして妻もその移送に含まれていた。そのことは数日後にようやく知らされたので、一家が遠く離れ離れになっていることなど〔その時は〕知る由もなかった。レオブシュッツでポーランド人たちはさらに礼拝を解散させて、自宅から何か物を持ってくることも許可せずに、教会から住民を連行した。労働可能者のみが留め置かれた。その他全員が移送列車に押し込まれた。そこでは、もはや歩くことのできない病人と健康な人が一緒に、ひとつの貨車に65人から70人が押し込まれた。貨車は外側から鍵をかけられ、我々の村の4人も、ニーダーオーダーヴィッツやザクセンのツィッタウへ向かう列車の中で亡くなった。これは妻から聞いたことである。

農場で我々は、わずかな食料と、さらに当然のように無給で農作業に従事しなければならなかった。重労働の果てに、所有者のポーランド人は我々をレオブシュッツ懲罰収容所へ連行した。まずポーランドの市役所に連れていかれ、そこで私は労働意欲の欠如を非難された。本当の理由はおそらく別にあった。ポーランド人市長と私を使役するポーランド人が農場にやってきたとき、私は使役者の方のポーランド人に、ほろほろになるまで働いたので、何か物資を提供されるべきであると申し立てたのだ。彼は私のフロックコート、毛皮、ブーツ、すなわち私の所持品すべてを身に着けていた。これだけでも、私を懲罰収容所へ送り込むためには十分であったのだろう。咎なきことであるので収容所にとど

まりたくはまっただけでなかったが、結局は収容所の各所に長らく抑留されることとなった。ナチ党员ではないにもかかわらず、である。

収容所では、朝4時半には身支度を始めなければならなかった。その後、ポーランド人のところに行って種々の労働を行った。例えば、穀類の積み込み、瓦礫の処理、農作業などといったことである——もちろんその間ずっとカービン銃を持った歩哨に監視されていた。収容所には90人から95人の男性と25人の女性がおり、食糧はかなり不足していて、丸1日パンが提供されない日もあった。我々は260台の貨車に、たいていは袋詰めされた粒のままの穀物を積み込んだ。銃床やムチ、その他何でもかんでもで殴られたので、それらの作業を行うのが困難な時も度々あった。我々がかなり衰弱していたために、まだ心あるポーランド人が、泥酔状態か病気なのではないかと尋ねてくるほどであった。しかしだからといって休息は与えられなかった。ある収容者たちが6人一班で夜にガラスの入った荷箱の輸送に従事していた時、その荷箱が倒れて残骸だけになってしまった。収容所に戻ったとき、彼らはムチで叩かれ、その叫び声が収容所中に響いた。私個人も、ある歩哨に殴られて右腕がダメになった。

著者はこの後、1946年8月の解放およびそれと同時に行われた追放に至るまでの、彼が受けた虐待と収容所の状況の経過について報告している。

証言⑫

[出典情報]] 第3部・第3章「1946年における強制移住作戦」第3節「シュレーゲンからの追放」(S. 788-790)

[資料情報] No. 342 オーバーシュレーゲンのナイセ郡グロス・クンツェンドルフ [スワニョヴィツェ] 出身のカール・ホフマンの体験報告。

オリジナル、1953年3月11日、8ページ。一部を活字化。

1945年6月28日の追放とロシア側の命令に基づく帰郷。ポーランド国境警備隊による4日間にわたる略奪。1946年1月末、6月初め、8月半ばの追放の過

程⁽¹⁰⁾。

はじめに著者は、赤軍侵攻の経過、1945年6月末の元〔ナチ〕党員全員の逮捕、ポーランド臨時行政機関による元党員の処遇について記述している。

この作戦の後、1945年6月28日朝4時にすべての住民が、立ち退きのために、10kgの荷物を持って村の大通りに整列させられた。この移送においてはまず、ギールスドルフ〔ギェラウチツェ〕、ボルケンドルフ〔ブルグラビツェ〕、ビショフスヴァルデ〔ビスクブフ〕の3つの市町村からなるギールスドルフまで歩いた。しかし労働に必要とされたいくつかの家族は、そこから再び故郷へ移送された。それからポーランド騎馬兵に率いられたこの集団は、ツィーゲンハルス〔グウホワジィ〕を越えてナイセ〔ニィサ〕方面へ追い立てられた。夜になって集団はドイッチュ・ヴェッテ〔ノヴィ・シフィエントウフ〕村の高台に到着し、その草原で野宿しなければならなかった。そこで1人の女性が我々のいる場所で、また1人のポーランド人随伴者も地雷によって命を落とした。翌日の朝にナイセへ移動し、その装甲室と武器庫に寝泊まりした。金銭や貴重品を探すための絶え間ない身体検査を受けながら数日が過ぎた。食事は与えられなかったので、人々はただ、近くの地下室から持ってきたジャガイモをかじった。

もしロシア人将校がこの群衆に注意深く接しなかったら、そこで多くの人が落命したことは間違いない。彼は歩哨に質問して、それが自発的な域外移住者であるとの情報を得た。しかし彼は群衆にも話を聞いて真実を知ったので、司令部から即時解放を発した。それにもかかわらず故郷へ帰還することを選んだ者は、プライラント〔ブシェウエンク〕村で再び拘束され、連れ戻された。さらにナイセを越えてパチュカ〔パチュクフ〕まで強制的に歩かされ、そこで置き去りにされ、その後それぞれが再び故郷へ到着した。それ以外の者は、より早く、何事もなく故郷に到着したが、その大部分がその間に入居していたポー

ランド人に住居を占有され、何らかの手段で寝泊まりする場所を探す必要があった。しかし翌朝には村から追い出されて 1km 離れたシュタインブリュッヘまで連行された。そこで彼らは数日間、同地の商店に滞在した。その間に、村全体がポーランド人とウクライナ人⁽¹¹⁾に占有されてしまった。

我々ドイツ人は食糧をいくらか得るため、ポーランド人のもとの労働に備えて招集され、割り当てを決められた。さらに、見事に実った収穫物を彼らのために刈り入れ、脱穀することを強いられた。ドイツ人がまだ持っていた財産も没収された。産業用地所と W・トゥスト社の土地はポーランド国家によって管理され、そこにいわゆる収容所に集められた特別な労働力が投入された。彼らはその後に行われる追放に加わることを許可されず、そこで保護されていると感じていたが、最終的には強制的に移住させられた。それゆえにたいい彼らは、なお東部地区⁽¹²⁾にいた。

1945 年 8 月の最後の日、ここから 4km 離れたチェコへ立ち退くことになっているということを、我々は貼り紙で知った。これは日曜 18 時までに行われるということであった。目的は、ポーランド国境防備部隊が任を解かれ、4 日間の略奪権を得るというものであった。我々は、こまごまとした全財産を持って、ニーダーボルケンドルフとビショフスヴァルデまで退去しなければならなかった。我々が 4 日後に再び帰還を許されたとき、そこにはわずかな物しか残されていなかった。すべてが引っ掻き回されて盗まれていたが、それゆえその部隊が、数日前に積み荷を満載した乗り物に乗って、この土地から離れたことが良くわかった。

1946 年 1 月 27 日にドイツ人全員が、宿屋ホフマンのホールに 20 キロの荷物を持って集合させられた。夜に車がやってきて、全員がそれに乗り、ドイツ・ヴェッテの駅に運ばれた。そこで 90 人ずつ家畜用貨車に積み込まれ、西へ向けて移送が始まった。しかし列車は、西〔西側連合国のことか〕が受け入れを拒否したということで、ゲルリッツ手前のリンデローデ〔リピンキ・ウジ

ツキェ]⁽¹³⁾ 駅で3週間停車した。3週間後、この移送列車は再びナイセまで引き返し、そこで人々は置き去りにされた。もう一度、この厳冬にグロース・クンツェンドルフまでの20kmを歩く体力は、もはや残されていなかった。この作戦の結果、約20人が命を落とした。

6月5日（聖霊降臨祭）に、ついに最終的な立ち退きが行われた。トゥスト収容所の一部とこの村の22人を除いて、全員がナイセの消防学校まで連行された。翌日、いわゆる通関（略奪）の後、西方への3つの移送列車で追放が行われた。そのうちの一つはフリートラントに到着し、他の2つはハノーファーのヴェンストルフとハルツ地方のオステローデにそれぞれたどり着いた。

我ら抑留者は、いまや可能な限りのすべての労働を課せられた。ゆえに例えば我々は8月の暑い日に死体を掘り起こして、再びきれいに埋葬し直した。その際に女性や子どもであることは考慮されなかった。1946年8月17日によりやく追放されるまで、虐待はルーティーンのようなものであった。我々はさしあたり同様にナイセまで移動させられ、消防学校で一晩過ごした後、翌日に鉄道でオーバーシュレージエンのレオブシュッツまで移送された。再び通関（略奪）を受けた後、そこから33人ずつ家畜用貨車でコールフルト〔ヴェングリニェツ〕を經由してマリエントール〔ニエモユフ〕まで移動し、そこで登録とシラミ駆除が行われた。レオブシュッツで、食糧を積んだ2両の貨車と2両の高齢者・病人用衛生車が編成に組み込まれるとの説明があった。それにもかかわらず、機関車の後ろには砲弾でボロボロになった2両の貨車しかなく、しかも我々は食糧の存在を確認できなかった。列車の真ん中には2両の空っぽの貨車が連結されていて、その扉には赤十字のマークがついていた。この移送列車はマリエントールで停車し、我々は客車で、荷物は貨車でさらに移送された。貨車の半分は〔ニーダーザクセンの〕フィーネンブルクで停車し、残りはゴスラーに向かい、そこから我々は再び分散させられた。約1000人のグロース・クンツェンドルフ村の住民が、かくしてニーダーバイエルンから東フリースラント

までの地域と東部地区に分散して移送された。

証言⑬

[出典情報] 証言⑫と同じ (S. 815-817)

[資料情報] No. 350 オーバーシュレージエンのレオブシュッツ郡ディアシェ
ル [ジェルジスワフ] 出身の農場主テオドーア・シュムシュの体験報告。

オリジナル、1952年7月31日。

1946年6月末の故郷の村からの追放、強制移住のための移送⁽¹⁴⁾。

以下の部分では、とりわけロシア占領下における幾人かに対する暴力や連行に関する記述がなされている。

1945年7月初め、わずかな財産しか持たないようなポーランド人が村にやって来て、空き地を占有した。それから次々と新たに移送された人々が到来して、それぞれが気に入った土地を探すようになった。ドイツ人所有者に部屋を割り当てられると、ポーランド人は「これは自分のものだ」と言うようになった。彼らは土地を得るとすぐ若造どもにドイツの銃器を与えたため、我々は戦争捕虜のように監視された。自分で育てたジャガイモをいくつか持ち帰るときにさえ、不良少年の付き添いなしには自身の農場に行くことが許されなかった。

こうした状況は9月11日まで続いた。午後4時にポーランド民警がすべての住居をまわり、5分以内に家から退去するようドイツ人に要求した。何が問題になっているか見当もつかないまま、900人を超えるドイツ人全員が城館^{シュロス}(収容所)に追放された。10月15日まで厳しく監視されたが、食料はかなり不足していた。(中略)収容所の滞在期間、ポーランド人は我らの全財産を自らの所有物とした。ここに来る前に与えられた5分間でかき集めることのできた(もの)以外は何も残されていなかったのに、だ。10月15日に収容所が解体され、ポーランド人は各々、思いのままにドイツ人を使役した。ドイツ人をもはや家

に入れようとしないうポーランド人もいた。中には私の家から財産を運び出すべくでなしもいて、私は家族とともに見ず知らずの家の屋根裏に寝泊まりする羽目になった。(中略)

「ポーランドの行政 (die polnische Verwaltung)」という言葉の意味したところと、その実際のところは、当時まだよく分かっていなかった。我々はただうわさを聞くだけだった。その噂は、ポーランド人はただ一時的にここにとどまっているだけである、というものであった。強制移住についても、我々は何も知らされなかった。1946年6月25日にドイツ語の大きなポスターに次のような掲示がなされるまでは。「ドイツ人の強制移住が、連合国によって決定され、我々はイギリス占領地区に移送される。良質な旅程と待遇が予定され、それぞれの列車ごとに2両の衛生車と同行員が付き、老人と病人は個別に病院に移送される」。それゆえ我々は一晩中出発命令を待った。7月6日にはすべての公務員と聖職者が郡全域から追放され、その翌日には隣の村から、強制移住が行われたという報告が届いた。7月23日の夜に命令が出た。「朝6時、全員が、それぞれが持つことのできる荷物だけを持って運動場に集合せよ」。荷車の使用は許可されなかった。

郡庁所在地のレオプシュッツまで25kmのところにある検査収容所への移送は、24日の朝7時から夜9時までかかり、1両ごとに35人が配分された。25日朝にも「検査を受けろ」との命令が出た。これには昼までかかった。そこで最後に残っていた必需品が奪われ、金や貴重品を見つけるためにシャツの隅々に至るまでが調べられ、構内(マリアツェル修道院)に夜9時まで留め置かれた。それから我々は駅へと出発した。そこで私は不運にも、70人も押し込められた貨車に乗ることになった。貨車では80歳を超えていた妻の両親を見つけた。この2人は病気がちでもあったので、命令によれば衛生車に乗せられることとなっていたが、全員がひとつの貨車に押し込められていた。長い旅路に先立って、(衛生用品が何もなくあったので)移送の司令官に老人たちを衛生車に入れる

ようお願いしたところ、そこには死体（私自身も目撃していたが）が置かれて
いるということを知らされた。司令官は、もし誰かが亡くなれば外へ投げ捨て
て何の面倒も見なくてもよい、という命令を受けていた。

このような取り扱いの中で、食料もなく、我々は7月30日にヘルムシュテッ
トに到着した。そこでようやく食事を食べることができたが、まだ移送は続い
た。31日朝にハーメルンに着き、すぐに自動車で新しい故郷へ向かった。しか
しそれは結局、我々にとっての故郷にはならなかった。

証言^⑭

[出典情報] 第1分冊・第1部「赤軍からの避難」第3章「シュレージエンでの
避難の体験」第1節 オーダー川以東の地域からシュレージエン周縁山地、ズ
デーテン地方、ザクセンへのドイツ系住民の追放：迫りくる赤軍からの避難。
(S. 405-410)

[資料情報] No. 107 オーバーシュレージエンのケーニヒスヒュッテ郡フリー
デンスヒュッテ [ノヴィ・ブイトム] 出身の元鉱山監督官カール・ヴァスナー
による体験記。

オリジナル、1952年8月、36ページ。一部を活字化。

工業地帯からの疎開とその後のリーゼン [カルコノシェ] 山脈を越えての避難。
降伏後のズデーテン地方での出来事とエールス郡への帰郷時の体験⁽¹⁵⁾。

以下の文章には、1922年のオーバーシュレージエン分割後の体験に関する記
述が前置きされている。

著者はフリーデン抗の運営に携わっていた。しかしその後、ドイツ人官吏や
労働者を体系的に排除することで産業の運営をポーランド化したこと、そして
それが1935年の彼の解雇につながったことを報告している。

1945年1月、ドイツをめぐる状況はすでにかなり悪化していたにもかかわらず

ず、フリーデンスヒュッテの住民たちは、実際の状況をまだよく理解していなかった。奇跡が願われ、ロシア軍が最も重要な工業地帯の一つであるオーバーシュレージエンに侵入することなどありえないと信じられていた。ロシア軍を最終的に阻止し、撃破するような大打撃が日々待ち望まれていた。東方では火砲の轟音が鳴り響き、爆発音が空気を震わせ、同時にばかげた噂が飛び交った。

1945年1月18日の早朝、ある親友が女性や子どもたちをすぐにオペルン〔オポーレ〕＝ブレスラウ〔ヴロツワフ〕方面へ避難させるよう勧めてきた。我が妻と子どもたちは、夜明けとともに急行列車で出発した。列車は超満員で、ブレスラウ行きの最終列車だった。私はとどまって職務を続行したが、1945年1月20日にナチ党地区指導者（Ortsgruppenleiter）から電話があり、市庁舎に呼び出された。そこは完全なるパニックに陥っていた。ナチ党区画指導者（Abschnittleiter）は状況を把握するためにカトヴィッツ〔カトヴィツェ〕にいる大管区指導者に連絡を取ったが、そこも同じように混乱状態にあるようだった。これからの数時間で何が起こるのか、誰もわからない状況だった。ロシア軍はすでにミスロヴィッツ〔ミスウォヴィツェ〕を越えており、部隊の接近がますます感じられるようになった。カトヴィッツからはもはや命令は届かなかったが、それでも市内では何十万人もの人々が、荷造りしたスーツケースや袋、箱を手元に座っていた。だが、彼らを輸送するための機関車や車両は足りなかった。ほとんどの計画や提案は、もはや実行不可能だった。

1945年1月21日、最初の避難民の集団が鉄道でフリーデンスヒュッテからリブニク＝ラティボル〔ラツィブシュ〕方面に向けて出発した。1945年1月22日、我々はレオブシュッツ近郊の村に到着したが、レオブシュッツとノイシュタット〔ブルドニク〕への路線はたくさんの列車で塞がれていたため、そこで下車させられた。厳しい寒さの中で、1人の子どもが凍死し、我々の集団でも1人の老人が、我々を迎え入れてくれた村で亡くなった。それが、我々が被った最初の喪失だった。数日間待ってもレオブシュッツに到達できないことに我々

が不安を感じ始めた。我々の機関車は撤去され、列車は線路上に空っぽのまま停車していた。

そのため一部の避難民は、独力での避難の続行を決めた。厳しい寒さの中、我々はホッツェンブロッツ [オソブラハ] を通過してノイシュタットへと徒歩で移動した。それは、トラックや避難する農民たちの車列の中に混じる小さな荷車や手押し車からなる、そして親衛隊兵士に随行される捕虜のイギリス人、フランス人、ロシア人、ユダヤ人たちの哀れな列だった。ユダヤ人たちはアウシュヴィッツからやって来ていて、ぼろきれを巻いた凍傷の足を引きずって歩いていた。倒れた者は撃ち殺され、そのまま放置された。それでも皆が、西へ進んでロシア軍の手から逃れたいという一心だった。オーバーシュレージエンのノイシュタットで一晩を過ごし、翌日にはナイセへと進み続けた。ここでは、悲惨な様子の人々の列、避難する家族、泣きじゃくる子どもたち、延々と続く車列という、どこもかしこも同じ光景が見られた。シュヴァイトニッツ [シフィドニツァ] の手前の村では、私が先に到着していた宿屋に、19 人もの凍死した乳児を連れていた女性たちがやって来た。これらの人々が経験した苦しみは、ぞっとするものだった。

そこから、ウラソフ軍⁽¹⁶⁾ の兵士たちが乗った車に乗せてもらった。私は2頭の肥えた豚の間に座っていたが、その時にコニャックのボトルを入手して活力を取り戻すことができた。葉巻、紙巻きタバコ、ソーセージが大量にあった。私はシュヴァイトニッツでこの集団から離れることとなったが、そうになると当然暗い気持ちであった。凍えきった手足で、軍隊の野営地のようにになっている駅に向かった。翌朝、ランデスフート [カミエンナ・グラ] を経由してヒルシュベルク [イエレニャ・グラ] へと列車で向かったが、その際に列車は数え切れないほど停止した。ヴァルムブルン [チェプリツェ・シロンスキエ・ズドルイ] で家族と合流した——これで、ひと安心はできた。

これまでの努力の報いとして自らに与えられると思っていた休息は長く続か

なかった。3 日目、ヴァルムブルンで登録をした際に国民突撃隊に「捕まった」。私は最年長者の 1 人として、ヒルシュベルクの紡糸原料収集所に派遣された。収容所は満員状態で、周辺村落から 1914 年以前の衣類や古い軍服がトラックに満載の形で絶え間なく運び込まれていた。それに加えて、旧式の武器、双眼鏡、靴も持ち込まれていた。ゲッベルスは戸棚を徹底的に空にする呼びかけを行い、ドイツ国民は「最終勝利」のために進んであらゆるものを差し出した。

その頃、私は 60 歳になった。思い出すのは、2 月中旬にあらゆる店頭や街角に、16 歳から 60 歳までのすべての男性に武器を取るようシェルナー元帥⁽¹⁷⁾ が呼びかけるポスターが貼られていたことだ。このシェルナーという、騎士鉄十字勲章のダイヤモンドを身につけた、良い評判しか聞かない人物は、その瞬間、私にとって最終勝利を保証する人物であり、ロシア軍をヴィスワ川の向こう側へと追いやるはずの人物だった。オーバーシュレージエンは再び自由になるだろう——それはほとんど想像を絶することだった。私は、今こそ皆が行動を起こさなければならないという確信を持って、まっすぐ兵役登録所に向かった。途中で誰かが私を呼び止めた。「ヴァスナーさん、そんなに急いでどこへ行くのですか」。その大尉は、フリーデンスヒュッテの知人だとわかった。私は自分の計画を簡単に話した。彼は私を見て微笑み、握手しながら言った。「ああ、かわいそうに」。私は少し頭に来てその場を離れ、30 分後には兵士になっていた。

1945 年 2 月 21 日にはもう、モラヴィアのシェーンベルク [シュンベルク] で入隊の報告をしなければならなかった。そこで私が経験したことは、それ自体がひとつの物語であるため、これ以上は触れないでおこう。[とにかく、] 最初に私を奮い立たせていた愛国心は、その後の訓練で完全に打ち砕かれたのである。復活祭の前日、私は訓練をほぼ完遂し、部隊から除隊となった。60 歳以上の高齢者は、希望すれば除隊できるということだった。病気で、気分も落ち込んだまま、私はヴァルムブルンに戻った。その間、私の家族はチェコに避難し、ビルゼン [プルゼニ] 南部のストラコニッツ [ストラコニツェ] に移送されて

いた。私はヴァルムブルンに住む親戚の家に滞在し、治療を受けた。

4週間が過ぎ、再び楽観的な気持ちになり始めた頃、アドルフ・ヒトラーが死亡したとラジオの早朝ニュースで報じられた。これはようやくの戦争の終結を意味すると誰もが思った。しかし、その終結は誰にとっても恐ろしいものになるだろうことも明らかだった——というのも、ロシア軍がベルリンに進軍し、追放された人々は生活基盤を失い、都市は破壊されていたからだ。何かしらの将来計画を立てることはまったく不可能だった。ヒルシュベルクの人々は故郷が自らのもに残るとまだ信じていた。

だがその数日後には、その考えは間違っていることが明らかになった。ロシア軍は勝利を確信して進軍を続け、すぐにヒルシュベルクの目前まで迫った。1945年5月7日の早朝、アンゾルゲ市長が、この間に解体された2つの野戦病院を軍医大尉として管理していた私の義兄に電話をかけ、早急にその場を離れるよう強く勧めた。我々は急いでいくつかの荷物をまとめ、自動車に積み込み、カッツェンシュタインパウデ⁽¹⁸⁾、ボラウン [ボルブニー] を経てタンヴァルトへと向かった。その光景は1月の時と変わらなかったが、素晴らしい春の天候は、山脈を越えて避難する人々の悲惨な状況とはまったく不釣り合いだった。

タンヴァルトでは、バイエルンとの境界に到達しようと、親衛隊の部隊が絶え間なく走り抜けていた。すべての車両は避難民でいっぱいだった。ロシア軍の追撃から逃れるために狂ったように走り去る車両たちを見て、私は背筋が凍る思いをした。

我々は郡立病院で一夜を過ごした。目を覚ますと、ドイツ国防軍が降伏したとの知らせを聞いた。チェコ人がかなり乱暴に我々を病院から追い出した。タンヴァルトのドイツ系住民は、チェコ人はドイツ人にひどい扱いをするだろうから、山脈を越えての帰還を試みるよう勧めた。

我々はロフリッツ [ロキイトニツェ・ナト・イゼロウ] に向かう道を進んだが、チェコの歩哨に止められ、ホッホシュタット [ヴィソケー・ナト・イゼロ

ウ]へと追い返された。ホッホシュタットの手前の森で検問があり、車から降りて丸太小屋に入るよう命じられた。車は搜索され、その際に義兄の軍用リボルバーが発見された。尋問は拷問のようなものだった。森の中の丸太小屋の後ろでは、不審なドイツ人が即座に銃殺されていた。私は武器の件では尋問を受けていなかったため、短い尋問の後に連行されるドイツ人の様子を見ることができた。やがてカービン銃の銃声が聞こえた。

巧みな言い訳と成功した賄賂の試みによって義兄は脱出に成功し、我々はホッホシュタットへの移動を続けた。市庁舎前の市場で、我々は車から降りなければならなかった——その自動車はそれ以来失われてしまったのだが。そして、あるホールに案内された。お金やその他の貴重品をすべて没収された後、我々はかつてのシュールングスブルク⁽¹⁹⁾に連行され、複雑な心境で翌日を待った。早朝、我々は市場にある学校に連行された。さまざまな武器を身につけたチェコ人が、我々の横を歩いていた。若い男性と女性は全員、清掃作業や道路封鎖の撤去作業に従事した。チェコ人たちは、ドイツ人たちに唾を吐きかけ、棒で殴ることを楽しんでいて。そのような扱いに耐えかねて、ある若者が乱暴な男を足で蹴ったところ、すぐに若い男たちの群れに打ち倒され、文字通り踏み殺されてしまった。

正午頃、ロシア軍の師団がホッホシュタットを通過すると聞いた。街は無数の赤い旗で飾られ、演説台が設置され、市庁舎には楽団が陣取った。かなり遅れて、隊列が通り過ぎた。私は、これほどみすぼらしい軍隊や車両をこれまで見たことがなかった。戦争は終結し、雲ひとつない空が市街を照らしていた。その中でこのならず者たちは傷だらけの車両の上でぼろぼろの身なりで、へこんだ靴を履いて、悪臭を放ちながら、何時間も休むことなく市場をガラガラと走り回っていた。これが勝者だったのだ！

ドイツ人は道端でひざまずいて祈らなければならず、その背後から女性や子どもたちが鞭で彼らを打った。この数日間に、野蛮な憎悪と邪悪な本能が猛威

を振るった。演説台からはドイツ人に対する勝利が祝われ、住民たちは叫び声を上げ、拳を天に向かって突き上げた。我々は目の前で繰り広げられる光景は、あまり心地よいものではなかった。

翌朝になると市行政当局は、投獄されていたドイツ人の国境の向こう側への追放を決定した。正午頃、我々は男女別々に行進を始めた。タンヴァルトとポラウンを通して、我々はリーゼン山脈の稜線に向かって進んだ。ポラウンには何百人もの避難民が到着しており、野原で一夜を過ごした。夜通し、ロシア兵が女性や少女たちを無理やり連れ去ろうとしてやって来た。眠っていた者たちの悲鳴がそのほとんどを追い払った。翌日、一行はさらに歩を進めた。チェコ人とロシア人は避難民から略奪を行い、若い女性や少女たちをレイプするために、いくつかの検問所を設置していた。夕方に我々はシュライバーハウ〔シュクラルスカ・ポレンバ〕⁽²⁰⁾に到着し、翌日にはヴァルムブルンに到着した。その道中、私はロシア兵に捕まり、「書類」を調べられ、拘束された。何千人もの兵士や民間人とともに、ヴァルムブルン、ヒルシュベルク、そして周辺の村々を10時間かけて行進しなければならなかった。深夜、我々はホールに連れて行かれたが、朝になるとロシア兵たちは姿を消していた。私は脇道を通して、すべての集落を避けながら、ヴァルムブルンに帰還した。

そうすると、非常に難しい決断を迫られることになった。どこへ行くべきだろう。親戚のところにこれ以上滞在することはできず、またそうしたくもなかったため、エールス郡のアイヒグルントへ行くことに決めた。私は、1939年に亡くなった兄と一緒に、1937年から1939年まで住んでいた土地を購入していたのだ。シュレージエンがポーランドに占領されたことは、私には知る由もなかった。ただ、オーバーシュレージエンが間違いなく失われたことは明らかだった。そのため、私はそこに戻ることはできなかった。さらに、妻と4人の子どものうち、私を迎えに来るだろうと思った。私は小さな荷物を作り、旅立った。義兄は、非常時に役立つようにと、金銭と貴重品をいくつか分け与えてくれた。そ

れでも、それは悲劇的な旅となってしまった！

私は、野道を通してヒルシュベルク市を避け、ロシア兵を警戒しながら、ボルケンハイン〔ボルクフ〕方面へと歩き続けた。夕方には私はある村を見つけ、農民たちの家で寝た。この農民たちはほぼ全員が帰郷していた。少なくとも、私にはそう見えた。彼らは、ポーランド人が彼らの豊かな農場を奪い、自らが物乞いの状態で故郷と受け継いだ土地を離れることになることを、まだ知らなかった。朝になると私はまた歩き始めた。(中略)

そうして、シュトリীগハウ〔ストシェゴム〕に到着した。長い列が故郷の村落へと戻っていた。これらの惨めな人々は、ポーランド人とロシア人に村々で略奪され、拷問を受けた。ある集団のリーダーが、略奪者であるポーランド人に立ち向かい、その盗賊たちから自身と馬車を守った。彼は銃床で殴られ、足で蹴られたが、ロシア人たちに救出された。私はその光景をこの目で見たし、その後もロシア人とポーランド人の仲の悪さを引き続き観察した。

ポーランド人とロシア人の関係についていくつかの意見を述べた後、著者は体験報告を続けている。

カント〔コンティ・ヴロツワフスキェ〕付近では、大勢の避難民たちが戻ってきていた。ある村には、非常に多くのロシア兵が宿泊していた。夜も遅くなっていたので、私はある家族のもとで宿泊することにした。その家族は、避難から戻ってきたばかりの母と娘だった。家財道具は庭に散らばっていて、窓のガラスはほとんど割れていた。女性たちは泣きじゃくっていて、我々は彼女たちが家の中にいくつかの物を運ぶのを手伝った。そこに、もう一人、ブレスラウ出身の男性が加わった。そうしていると娘は、自分の子どもでもある乳児の亡骸を連れてきたと私に話してくれた。彼女は、どうしてもその亡骸を家に持ち帰り、葬りたいと望んでいた。私は娘に外に出ないようにと警告した。兵士たちが女性たちをじろじろと物色しているからだ。彼女は私の言うことを聞こうとせず、夜に我々はその子を葬った。(中略)

著者はあるロシア兵とともに一夜を過ごさなければならなかったため、翌朝には同行者と一緒に早々にその場を離れた。

ブレスラウの手前で、我々は再び略奪された。ロシア兵が、母のものである金の装飾品を含む私の貴重品をすべて奪った。そしてようやく我々はブレスラウに到着した。南側は、中央駅まで瓦礫の山と化していた。街の一部は、ほとんどどこがどこか分からないほど壊滅的な被害を受けていた。そこら中にポーランド人が座っていた。我々はすぐに街を東に向かって離れ、フンツフェルト〔プシェ・ポレ〕へと歩き続けた。ここでも多くの被害が見られた。私はもう落ち着きがなく、午後も遅い時間帯になっていて、ズィビュレンオルト〔シュチョドレ〕近くのアイヒグルントに早く到着したかった。自宅を見て、まだ屋根があるかどうかを確認したかったのだ。アイヒグルントの水車の前の小さな橋を渡った頃には、もう暗くなっていた。木々の間から、家屋は無傷であるのが見えた。そのことはとても嬉しかった。水車はとても風変りに見えた。その前に立つと、正面全体が、芸術家である私の兄の大きな油絵で覆われていることがわかった。誰もいないようだったので、私はすぐに2枚を降ろし、私の家まで運んだ。家のドアは大きく開いていた。玄関には、腐ったジャガイモの皮が山積みになっていて、すべてのドアが開いていた。私は2階のリビングルームへ上がった。そこは荒れ果てた様子で、藁やほろきれ、倒れた家具がそこら中に散らばっていた。中央には大きな本棚があり、背面の壁は引きちぎられ、本が山のように散らばっていた。寝室では、ベッドにはマットレスだけが残っていた。化粧室では、すべての戸棚が開け放たれ、中身のすべてが略奪されていた。家じゅうの様子がそういった調子だった。陶磁器やガラス製品はいくつか見つかったし、入念に隠匿しておいた屋根裏部屋は発見されていなかった。そこには、かなりの量の貴重品が隠されていた。

すっかり暗くなったので、私はベッドのマットレスを整え、冷えた皮付きジャガイモをラードとともにいくつか食べて、気味の悪い疑問を胸に抱えたまま眠

りについた。これからどうなるのだろうか？

著者は、ロシア占領下での生活、1946年9月までのポーランド行政の状況、ソ連占領地域での体験、そして西ドイツで生活を再建した経験について詳しく述べている。

証言⑮

[出典情報] 第2分冊・第2部「1945年以降の東方ドイツ系住民の生活基盤の破壊」第5章「ロシア占領下およびポーランド行政下でのシュレージエン」第3節「ニーダーシュレージエンと国境近くのオーバーシュレージエン西部の諸郡」(S. 413-415)

[資料情報] No. 231 オーバーシュレージエンのレオブシュッツ郡クルーク〔ジバンツェ〕出身の男性教師 R. ヨハン・ゴヨフチク。

オリジナル、1952年8月。

ドイツ系住民の全般的状況と生活条件。1946年7月の追放までのポーランド行政機関による強制措置⁽²¹⁾。

故郷での避難民の列と降伏後の帰郷に関する短い記述のあと、著者は以下のように記している。

人々は力を振り絞って片づけを行い、数千の砲弾、爆弾、地下壕、射撃壕、40両の戦車の残骸、3機の航空機、塹壕によってズタズタにされた耕作地に、ジャガイモを植えはじめた。夏作物の種子は発芽しなかった。325ヘクタールを耕すには、ロシア兵もほしがらないような21頭の年老いて弱った馬しかいなかったし、農場には175ヘクタールに馬が3頭しかいなかった。

はじめこの村は、所属機関に忠実に従うソ連の人民委員の支配下に置かれた。かねてからこの村に投入されていたポーランド人戦争捕虜は、彼らの故郷がソ連の手に落ちたために取り残されたままとなり、そのまま村落の行政を引き渡

された。

70 人くらいの帰郷した住民とともに家々や村内を片づけ、協力し合って農地を耕作した。約 70 人のドイツ人戦死者が農地や茂みに倒れていて、そのうち半分は認識票も証明書もほとんど身に着けていなかった。ロシア兵は前庭に埋葬され、その墓は布団皮から作った赤いオベリスクで装飾された。

権力を手中にしたポーランド民警は、我々を様々に苦しめる存在となった。彼らにとって、我々には私有財産権と人権はなかった。1945 年 8 月初め、6 人の村の男性が、理由の通告なしにポーランド民警によってポーランドの労働・懲罰収容所へ連行され、ひどい虐待を受け、親族との関係を絶たれた。そして帰ってきたのは切断された遺体だけであった。

確か 1945 年 8 月のことであったが、ポーランドの行政機関がなんとか設置されたあと、純粋なドイツ系住民に関しても公用語（Amtssprache）はポーランド語のみとなり、通訳は認められたものの、公示もポーランド語のみであった。

医者やほぼすべての薬剤師が不在であることが、衛生管理の面から非常に憂慮された。ドイツ人医師は近隣の村にはいて、彼は少なくとも 7 つの村を無料で診療していた。その代わりに人々は彼に食料を分け与えた。貨幣には価値がなかったのである。彼自身は 1946 年の新年のあとに、ぼろぼろの服しか着ていないポーランド人の熱病患者を厳寒の中で死に至らしめたという罪を負わされて、亡くなった。チフスは二度の予防接種で防ぐことができた。この村では 3 つの軽症例しか出なかったが、近隣の村々では多くの死者が出た。

食料に関する事情はかなりひどかった。我々は、ジャガイモや野生で生えている野菜の新たな収穫まで何とかして食いつないだ。広範囲にわたって商店がなく、すべてが破壊しつくされていた。家畜用の塩を廃墟から拾ってきて、食塩として使用した。隣人が火をおこしてくれて、古いバケツの中で炎が輝いた。

牛に関しても、我々は 21 頭の粗悪で病気がちな雌牛しか飼育できず、その中でもミルクやバターはポーランド民警に引き渡さなければならなかった。家畜

の飼育は、村全体でもニワトリ 2 匹、ガチョウ 2 匹、子豚 1 匹から始まった。

農民全体の 95% が死亡していた。それでも人々は勤勉さ、組織性、粘り強さを発揮し、1945 年も精力的に収穫を行った。脱穀は巻き上げ脱穀機、手動脱穀機、からざお —— かなり後になってようやく —— 電動脱穀機で行われたが、そうした作業は満足感をもたらしてくれた。その後、それによって毎月 8kg のパン用穀類が各々に分配されるようになった。確かに、書類上は嫌われ者が排除されてはいたが。この状況において、穀類は我々によって「調達」されたので、やはりそれは我々の収穫であった。けれどもポーランド人はそれを大量に持っていき、自身の衣類を調達するか、火酒へと蒸留した。穀類は価値あるものであった。

我々は、即時の講和を通じた状況改善と解放への希望を強く抱いていた。我々は、今日では笑ってしまうような、子どもじみたスローガンを信じていた。

1945 年から 1946 年にかけての冬は厳しいものであった。照明器具はなく、窓は割れていたので板で応急処置し、ストーブはすべて壊れて使い物にならなかった。農民は弱りきった馬で 55km も離れた炭坑から、パン用穀類で交換した石炭を運んでこなければならなかったのだ、代わりに木片をくべた。たとえ一度は幸せになっても、3 日後には再び炭坑へ行く必要があったが、しばしば彼らに穀類を奪われたので、手ぶらで帰ってくることもあった。だが、こうした取引は合法であったのだ。

春の播種は、共同作業で行われた。ロシア人がよく滅菌された種子を供給してきたが、それは収穫後に返納することとなっていた。

1945 年 7 月に 12 のポーランド人家族が、経済がほとんど破壊されていないポーランド東部から入植してきた。彼らは家具付きの最良の住居をあてがわれ、一方でドイツ人家主は近隣の家や部屋に押しやられた。きわめて簡易な手続きを経て、ポーランド人は農場の所有者に任命された。ドイツ人は、彼らの畑を耕さなければならなかった。

1946 年 6 月にポーランド人の不注意から大火事が発生した。当然のごとくドイツ人に責任がなすりつけられ、それに応じた嫌がらせが行われた。その後、すべての状況改善の希望はもはやしぼんでしまったので、1946 年 7 月半ばの追放が救済のように感じられた。

この追放は 2 つの段階で行われた。まず労働不能者から、その数週間後に、まだ穀類の収穫を行わなければならない労働可能者が追放された。かつてシュタイラー伝道会本部であった、レオブシュッツの「マリア・トロイ」集約収容所⁽²²⁾から、1 両につき荷物を持った 45 人の乗せた 50 台以上の家畜用運搬車から構成された、1675 人を収容した輸送列車で、目的地もわからぬまま西へ移送された⁽²³⁾。

註

- (1) 衣笠太郎「〈史料翻訳〉『東中欧からのドイツ人追放の記録』第1巻（3分冊）「オーダー・ナイセ線以东の諸地域からのドイツ系住民の追放」より、オーバーシュレージエンに関する証言（1）」『近代』（神戸大学近代発行会）、第129号、2025年、55-77頁；衣笠太郎「〈史料翻訳〉『東中欧からのドイツ人追放の記録』第1巻（3分冊）「オーダー・ナイセ線以东の諸地域からのドイツ系住民の追放」より、オーバーシュレージエンに関する証言（2）」『近代』（神戸大学近代発行会）、第130号、61-82頁。
- (2) BArchiv OSTDOK2は、1949年に始動した『追放の記録』編纂事業の中で収集された膨大な証言記録を収録するコレクションである。証言者の宣誓書や証言収集にあたっての調査者による意見書が付されている。意見書では証言の要約に加えて、場合によっては掲載を推薦する理由が明記されている。BArchiv OSTDOK2の基礎情報についてはドイツ連邦文書館に問い合わせると入手できる、“Bestandsbeschreibungen_OstDok_22.06.11”と題された資料も参照した。
- (3) BArchiv OSTDOK2/225, Bl. 22-26.
- (4) BArchiv OSTDOK2/227, Bl. 71-79.
- (5) BArchiv OSTDOK2/225, Bl. 51-57.
- (6) BArchiv OSTDOK2/223, Bl. 10-47.
- (7) BArchiv OSTDOK2/225, Bl. 3-11.
- (8) 2026年3月現在までの関連刊行物については、本シリーズ（2）の註3を参照。
- (9) *Dokumentation der Vertreibung*, Bd. I/2, Nr. 307, S. 707-708.
- (10) *Dokumentation der Vertreibung*, Bd. I/2, Nr. 342, S. 788-790.
- (11) 「送還民」と呼ばれる強制移動者のこと。第二次世界大戦末期から戦争直後にかけて、「クレスィ」と呼ばれる旧ポーランド東部領土のポーランド系住民はシュレージエンなどの新西部領土への強制移動の対象となった。移住対象はあくまで「ポーランド人」とみなされた人々であったが、シュレージエンへの強制移動者にはポーランド系住民とウクライナ系住民の混住する東ガリツィア地方の出身者が多く含まれていたため、ここで著者はその一部を「ウクライナ人」と呼んでいるのだろう。付言すれば、そこには「はるか東方から到来した野蛮人」という侮蔑の含意がある。
- (12) ソ連占領地区のこと。のちのドイツ民主共和国（東ドイツ）。
- (13) [原注] リンデローデはゾーラウ郡に位置し、ゆえに「ゲルリッツ・ナイセの玄関口」と呼ばれていた。
- (14) *Dokumentation der Vertreibung*, Bd. I/2, Nr. 350, S. 815-817.

- (15) *Dokumentation der Vertreibung*, Bd. I/2, Nr. 107, S. 405-410.
- (16) 1944 年以降、アンドレイ・ウラソフ（1901-1946 年）が組織した親ナチ組織。ウラソフはソ連の職業軍人であり、レニングラード包囲での敗北の際にドイツの捕虜となったが、その直後にドイツ側に寝返り、対独協力者となった。ナチの指導下でウラソフが創設したのは「ロシア解放軍」という軍事組織であったが、総司令官である彼の名前をとって「ウラソフ軍」とも通称された。ウラソフは 1945 年 5 月初めに投降、ソ連に引き渡されて死刑となった。“Andrey Andreyevich Vlasov,” *Encyclopedia of Modern Ukraine* (URL: <https://esu.com.ua/article-35130> 閲覧日：2026 年 1 月 9 日).
- (17) フェルディナント・シュルナー（1892-1972 年）。ドイツ陸軍の職業軍人。大戦末期には中央軍集団司令官として、ズデーテン地方およびシュレージエン地方の防衛と住民避難を指揮する任務にあたった。終戦と同時に逃亡、その後アメリカ軍に投降し、ソ連に引き渡された。戦犯として有罪判決を受けるも、2 年で釈放されている。“Schörner, Johann Ferdinand,” *Deutsche Biographie* (URL: <https://www.deutsche-biographie.de/sfz115575.html#ndbcontent> 閲覧日：2026 年 1 月 9 日).
- (18) リーゼン山脈に設置されていた山小屋。筆者はこの移動でチェコ側に越境している。
- (19) 原語は Schulenburg. ナチによって創設・運営された政治エリート養成機関。
- (20) リーゼン山脈の旧ドイツ＝現ポーランド側の都市。筆者はこの移動で境界を再び越えて旧ドイツ領側に帰還した。
- (21) *Dokumentation der Vertreibung*, Bd. I/2, Nr. 231, S. 413-415.
- (22) 同地のカトリック女子修道会「マリア・トロイ Maria Treu」の施設を転用した収容所。この修道会は神言会（＝シュタイラー伝道会 Steyler Missionare）によって運営されていたため、こうした説明になっている。以下の記事も参照。Karl Rathmann, Rosen, *Leobschützer Heimatbrief. Mitteilungsblatt für Stadt und Kreis Leobschütz*, München, Januar 1963, S. 5-6 (URL: https://digishelf.de/objekt/012780200_1963/21/). またこちらの Facebook 記事には、1930 年時点の同施設の写真も掲載されている。URL: <https://www.facebook.com/photo.php?fbid=693876829406994&id=100063540492727&set=a.475587494569263> 閲覧日：2026 年 1 月 3 日。
- (23) [原注] No. 306, 307 [証言⑪と⑥] を参照せよ。